

共生社会 (S) ワーキンググループ報告

向 哲嗣^{1*}、金子 隆²

A report on the symbiotic society “S” working group session

Akitsugu MUKAI^{1*} & Takashi KANEKO²

1. アイランズケア (〒100-2211 東京都小笠原村母島字静沢)
Islands Care, Shizukazawa, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.
2. 小笠原村議会議員 (〒100-2101 東京都小笠原村父島字西町 小笠原村役場)
Ogasawara Village Assembly Member, Ogasawara Village Office, Nishimachi, Chichijima,
Ogasawara, Tokyo 100-2101, Japan.

* mukai@islandscare.org (author for correspondence)

要旨

2020年12月に開催したオガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ本大会において、共生社会Sワーキンググループでは、組織体制の創出、オガサワラカワラヒワについての知識と意識の共有について議論し、保全計画を策定した。

キーワード

PHVA ワークショップ、市民団体、母島

1. 共生社会 (S) のテーマ

Sはsystem (=体系や組織)を示している。共生社会 (S) ワーキンググループの議論のテーマは、オガサワラカワラヒワと共生する社会の構築に必要な課題について、実行委員会で整理した7項目のうち、社会に対する取り組みに関する3項目である(表1)。これらの課題は、ワークショップ本大会前に、島民および島内在住行政担当者のワークショップ参加者から抽出されたものである(佐々木・向、2022)。

表 1. 共生社会（S）ワーキンググループで策定した保全目標および行動計画

Table 1. Conservation goals and action plans developed by the symbiotic society “S” working group

<p>課題 保全するための組織体制がない</p> <p>【目標】オガサワラカワラヒワの会（仮称）をつくる。</p> <p>【行動計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報収集、情報共有、普及啓発等のコアとなる場をつくる。 ・ワークショップ参加者間のネットワークの構築から開始する。 ・会の資金集めの手段を検討する。 ・島内外の関係者が補完することで、マンパワー不足、資金不足など顕在化している課題についても視野に入れ取り組む。
<p>課題 守る意識が不足している</p> <p>【目標】島内の認知度 100%（1年）／日本中が知る（3年）／世界中で認知されている（GOAL）。</p> <p>【行動計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報の発信（普及啓発）を主眼に置く。 ・愛称を決める。 ・オガサワラカワラヒワの会（仮称）を通して、オガサワラカワラヒワ保全の解決を図る。 ・日本産鳥類目録で独立種と認められる見通しのため（3年後）、認定後全国的にアピールする。
<p>課題 オガサワラカワラヒワについての知識が不足している</p> <p>【目標】情報収集する受け皿をつくる。</p> <p>【行動計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報の収集（研究成果、歴史的背景など）や共有に主眼を置く。 ・展示物（剥製やフィギュアなど）を制作する。展示スペースを開設する。 ・オガサワラカワラヒワの会（仮称）のネットワークを利用して、情報を蓄積していく。

2. 参加者

このワーキンググループの参加者は、農業者、地元観光協会、島内在住行政担当職員、村議会議員、地元小中学校教員、小笠原島外の環境 NGO、NPO 職員等であった。参加者名簿は以下の通りである。

<共生社会 S ワーキンググループ参加者（五十音順）、所属は 2020 年 12 月現在>

- 天谷優里（小笠原村立母島中学校）
- 大野正人（公益財団法人 日本自然保護協会自然のちから推進部）
- 奥野玉紀（NPO 法人日本ガラパゴスの会）
- 小関耕紀（一般社団法人 小笠原母島観光協会）
- 大日方吉彦（NPO 法人小笠原自然文化研究所）
- 金子 隆（小笠原村議会議員／一般社団法人小笠原村観光協会）※ファシリテーター
- 草刈秀紀（一般社団法人リアル・コンサベーション）
- 小林哲也（一般社団法人 小笠原母島観光協会）
- 佐々木メグミ（国設鳥獣保護員）
- 佐藤大悟（小笠原村立母島小学校）
- 清水良一（小笠原村議会議員）
- 渋谷正昭（小笠原村副村長）
- 鈴木雄大（東京都小笠原支庁土木課自然環境担当）
- 築館俊一（小笠原村議会議員）

鶴田典之（小笠原村母島支所）
平賀洋子（一般社団法人 小笠原母島観光協会）
宮川五葉（東京都小笠原支庁土木課自然保護指導員／ガイド）
宮城洋子（母島島民）
宮澤りおん（母島島民）
向 哲嗣 事務局長／（一般社団法人 Islandscape）※副ファシリテーター
持田憲一（小笠原村教育委員会事務局）
森實祐子（林野庁関東森林管理局小笠原諸島森林生態系保全センター）
山本 裕（公益財団法人日本野鳥の会自然保護室）
和田慎一郎（環境省小笠原自然保護官事務所）
Rocky Savory（小笠原村商工会）

3. 課題 保全するための組織体制がない

共生社会（S）において、議論された内容は多岐にわたったが、特に議論の中心になったのは主に組織体制の確立についてである。

3-1. 提起された問題

当該地域である母島は島民が約450人程度と、様々な状況でマンパワーが不足しており、島という特殊環境であることから周辺地域から恒常的にフォローを受けにくい。そのため、抽出された意見の中では、組織体制についての問題が多く提起された。以下に問題を列挙する。

- ・各人ができることを実行できていない。
- ・保全行動が遅い。
- ・一致団結ができていない。
- ・保全を進められるリーダーシップがない。
- ・環境省の職員が足りていない。
- ・母島の環境に特化した職員が足りない。
- ・保護増殖計画が策定されていない。
- ・保護増殖事業に一般の人のマンパワーを増やすことができていない。
- ・行政がオガサワラカワラヒワを守る明確な方針をもっていない。
- ・オガサワラカワラヒワに対する保全計画が現時点でない。
- ・継続的な保全策がない。もしくは不十分。
- ・保全計画がない。
- ・複数の対策が同時に実行できていない。
- ・実現可能な対策が考えられていない。

- ・島民がこの対策に協働できる活動がない。
- ・地元で市民団体をつくる。
- ・行政とは別に市民活動を行う必要がある。
- ・繁殖地が無人島のため、島が関わりにくい。
- ・島民が属島の対策に関わるには安全上難しい。
- ・繁殖地（向島）に拠点（宿泊地等）がない。
- ・資金不足（行政、民間）
- ・行政の予算に頼っている。
- ・クラウドファンディングなどの行政によらない自由度の高い予算の確保ができていない。
- ・予算不足に足して、獲得可能な助成金やクラウドファンディングなどに申請ができていない。
- ・入島税などの安定資金がない。
- ・保全の予算が不足している。

以上のように「コアになって活動を継続できる人・団体が不在」「母島の環境行政職員不足」「保全に関わる人手不足」など人的資源の不足について指摘する内容が多かった。

3-2. 課題の原因究明と解決策

上記のような課題について、問題の原因となっている要素とその解決策が提起された。

- ・WS 参加メンバーのつながりを作っていく体制づくりが必要（体制づくりに何をすることが抜けていると体制の意識がわかりにくくなる）
- ・実際にオガヒワを集落内の中に呼び込む機会を増やす。
- ・ガラパゴスを例にすると、社会と島の生態系をどうつなげていくのか。体制役割分担のイメージの共有をできるようにするとわかりやすくなる。
- ・オガサワラカワラヒワがどんな鳥なのか周知する。
- ・オガサワラカワラヒワを見る体験を通して島民に地道に伝えていく。
- ・オガサワラカワラヒワを見た人が写真を撮るなどの行動を増やす。
- ・島の人がオガサワラカワラヒワに関心をもつきっかけを作る（イベント、クイズ大会、模型作りなど）。
- ・ステッカー、Tシャツなどを利用して普及啓発
- ・保全対策への資金不足を解決するために、行政主導、民間主導による予算の獲得を行う。

このように体制づくりに必要な人的資源不足の解消のためには、島内外にオガサワラカ

ワラヒワそのものの普及啓発が重要であり、持続的に活動していくためには、そのための資金獲得も同時に行わなければならないことが示された。

3-3. 目標設定（体制づくり）

上記のような問題を解決するための目標として、カワラヒワの会（仮称）を発足することが示された。この会を通して、情報の収集と共有・普及啓発を行い、島内に軸足を置きつつ母島島内と周辺属島を分けて活動することが示された。

4. 課題 知識が不足している

二つ目の課題としては、オガサワラカワラヒワの知識が不足しているということが挙げられた。この問題は前述の人的資源の不足の原因にも関係している項目である。

4-1. 提起された問題

問題としては以下のような意見が提起された。

- ・住民への周知が足りない。
- ・オガサワラカワラヒワ自体が知られていない。
- ・オガサワラカワラヒワを見たことがない。
- ・オガサワラカワラヒワを直接見られる場所がない。
- ・日本全国にオガサワラカワラヒワの現状が知られていない。
- ・島民のオガサワラカワラヒワの認知度が低い。
- ・島民全員がオガサワラカワラヒワのガイドとなる。
- ・知識欲・キャラクター設定（オガサワラカワラヒワはここを見ると楽しいなどの共通認識）が必要
- ・古い島民からは「クザイモン」という呼称だと話を聞けるが、「オガサワラカワラヒワ」だと情報収集ができないため、これまでの情報収集が不完全であった。
- ・母島本島におけるオガサワラカワラヒワの生態がわかっていない。
- ・オガサワラカワラヒワの情報が少なすぎる。
- ・オガサワラカワラヒワの現状や過去についてあまり知らされていない。
- ・過去も含めた話や知識も必要
- ・オガサワラカワラヒワは専門家からの知識を得ているのが現状
- ・村のケーブルテレビが活用されていない。
- ・保全や情報提供のルールを作る。
- ・オガサワラカワラヒワの現状をタイムリーに伝えられていない。
- ・母島にビジターセンターがない。
- ・情報発信ができていない。

- ・海外を視野に入れた情報発信ができていない。
- ・母島に自然環境系の中心センターがない。
- ・オガサワラシジミなどの絶滅の教訓を堅守されていない。
- ・科学委員会などがどこに有効に働いているかを見える化できていない。
- ・情報を受け取る場所・体制がない。

これはオガサワラカワラヒワの個体数が極めて少ないため、見る機会が少なくなったことで、知る機会も減っていることや、生態的な研究も進みにくいことが原因してあげられる。

オガサワラカワラヒワはそもそもその生態が畑を中心とした人間活動と密接に関係しており、入植当初から身近な存在であるが、このような昔からの人とのつながりについても共有されていない。そのため、島民に対してオガサワラカワラヒワに関するヒアリングを行った（本稿付録を参照）。また、これらの情報を共有できるような自然環境関係の施設等がないことも挙げられている。

4－2．課題の原因究明と解決策

上記のような知識不足について、以下のような解決策が提起された。

- ・島内で収集した情報を共有する場所をつくる。
- ・情報を受け取る入り口はインターネット
- ・村などのHPに特設ページを入れる。
- ・小笠原のガイドブックや関連本に固有種に関するページを作る。
- ・小さい子供から大人まで同じ知識を持つ必要がある（学校教材など利用）。
- ・昔からいる島民に聞いて発表する経験を、子供たちに実施してもらう。
- ・内地のカワラヒワとは違うという情報を伝える。

このような解決策としては、知識の共有のためにインターネットやガイドブック、教材など様々な媒体を通して知識の共有を行う必要があることが示された。

4－3．目標設定（情報の収集）

上記のような知識不足の解決に向けて、以下の目標が設定された。

1年目

- ・島民がオガサワラカワラヒワの生態について知っている。
- ・情報収集する場所を作る。
- ・資料を収集する。

- ・島民参加型のモニタリング調査

3年目

- ・出版物やHPをつくる。
- ・オガサワラカワラヒワの情報を展示する施設を母島につくる。
- ・オガサワラカワラヒワの生態を明らかにする。
- ・科学的なことは研究者に任せ、歴史や母島での観察ポイントを知る人を育てる。

GOAL

- ・島民を巻き込んだ市民調査活動を実施する。

これらの課題から、その解決の目標として情報収集する受け皿をつくることが示された。行動計画としては、情報の収集（研究成果、歴史的背景など）や共有に主眼を置くとされ、ネットワークを利用して、情報を蓄積していくことが提案された。また、展示物（剥製やフィギュアなど）の制作や、展示スペースを開設することも必要な計画とされた。

5. 課題 守る意識が不足している

三つ目の課題としては、オガサワラカワラヒワについて守ろうという意識が不足しているということがあげられている。

5-1. 提起された問題

問題としては、以下のようなことが提起された。

- ・住民の認識が不足している。
- ・住民の協力が不足している。
- ・地域に対する郷土愛が足りない。
- ・住民の危機感がない。
- ・オガサワラシジミに比べて危機が知られていない。
- ・好きになったり、愛でたりする関係性がない。
- ・主体性がない。
- ・子供に伝えられていない。
- ・自分にできることを実行できていない。
- ・オガサワラカワラヒワの過去と人とのつながりが解っていない。
- ・ご当地ゆるキャラがない。
- ・愛称がない。
- ・一人一人が考え、実行できていない。

- ・パッション、愛、そして行動が不十分
- ・一般島民が参加できる調査がない。
- ・外来種対策の島民意識が低い。
- ・オガサワラカワラヒワが絶滅すると困るという意識化ができていない。
- ・学校教育に取り入れられていない。
- ・「ひとりひとりができること」の具体的な提示がされていない。
- ・みんなが他人ごとであること
- ・次世代不足
- ・関心が低い。
- ・オガサワラカワラヒワを守る世論ができていない。
- ・島民に生々しく必死に語りかけていない。
- ・この問題が島民全体の課題となっていない。
- ・資金がなくても守るという気合が足りない。
- ・保全活動がポジティブシンキングになれていない。
- ・保全のための民間および地域の理解と協力が不足している。
- ・危機感が一部の人たちだけで動いている。

5-2. 課題の原因究明と解決策

上記のような課題について以下のような意見が出された。

- ・島内外に協力者を増やす。
- ・認知度が低い理由として、メグロと比べて観察しにくい。
- ・島外の鳥愛好者の情報からメグロの価値を知ることができる。それがメグロの付加価値となる。
- ・子供たちは島外からの意見にも敏感で、親や周辺の大人への普及が大きい。
- ・自分たちがオガサワラカワラヒワを知ることが大事
- ・オガサワラカワラヒワ、もしくはカワラヒワの標本など、実物に近いものを見る必要がある
- ・オガサワラカワラヒワを見に行っても大丈夫なのか（観光客が農地へ見に来ることに弊害あり）。
- ・次世代不足・他人事

このような意見の多くはオガサワラカワラヒワの個体数が極めて減少してきており、見たことがないという島民も多く、実際に直接見て実感できる状況が少ないということに起因している。そして、その危機的な状況についても発信不足により共有がされていないことが、住民を含めた周囲の協力が得られにくい状況を作り出している。

5-3. 目標設定（情報の発信）

上記の問題を解消するために以下の目標が設定された。

1年目

- ・オガサワラカワラヒワと、メグロなどの他の鳥を見分けられるようになる。
- ・島民に向けた観察会を行う。
- ・オガサワラカワラヒワを観察する際のルールをつくる。

3年目

- ・日本中が知っているようにする。
- ・定期船内の映像でオガサワラカワラヒワを紹介する。

GOAL

- ・世界中が知っているようにする。
- ・海外の人たちが観察しに来るようになる。

行動計画としては、情報の発信（普及啓発）を主眼がおかれた。まず、1年目では島内の認知度100%を目指し、3年目では日本中の国民が知るようになり、最終的には世界中で認知されていることが設定された。3年後の目標については、日本産鳥類目録の次回改定が2023年であり、その時に独立種と認められる見通しのため、認定後全国的にアピールすることが現実的であるということも考慮された。

6. オガサワラカワラヒワの会（仮称）の発足と活動内容

オガサワラカワラヒワと共生する社会の構築に必要な課題の中でも、社会に対する取り組みに関する3項目について、目標および行動計画を包括的に解決するために、「オガサワラカワラヒワの会（仮称）」が発足することが提案された。ワークショップ本大会において投票により愛称が「オガヒワ」に決定したことから、「オガヒワの会」が正式名称となった。活動内容は主に3つである。詳細については表2に示した。

1つ目は地元の市民保全組織として、島民が保全に参加できる場所を提供することである。具体的には、市民調査活動や保全ボランティア活動、共存するルールの構築や活動資金の調達などを行うこととした。

2つ目は情報発信の場所として、島内外の様々な人たちから起こるオガサワラカワラヒワに関する保全活動を取りまとめて発信することである。発信の手段についてはHPやSNSを利用した発信を行う。また、講演会の企画や実施、広報媒体の作成なども行うこととした。

3 つ目は情報収集の場所として、様々な人の保全活動の情報の収集を行うことである。これはメーリングリストなどのネットワークや HP を利用することで行われる。また、まだ未解明の生態的情報の収集のほか、過去も含めた地域との関わり等についての話などの収集も行うこととした。

表 2. 「オガヒワの会」の活動内容

Table 2. Activities of the “Oga-hiwa’s group”

<p>【保全組織体制】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 島民が保全に参加できる場所の提供 ・ 共存するルールの構築 ・ 保全のための餌場の管理等ボランティア活動 ・ 市民調査活動 ・ 活動資金調達
<p>【情報発信場所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 島内外の各アクションプランの進捗等の発信と共有 ・ 各種イベントによる発信 ・ 講演会の企画、実施 ・ 島内外への広報 ・ HPの開設 ・ 広報媒体の作成（着ぐるみ、パンフレット、愛称の募集）
<p>【情報収集場所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 島内外の各アクションプランの進捗等の収集 ・ 過去も含めたオガサワラカワラヒワにまつわる話の収集 ・ インターネットによる情報の受け取り ・ 生態的情報の収集

7. 謝辞

本稿をまとめるにあたり、ご協力頂いたワークショップ参加者の皆さまに感謝申し上げます。

8. 引用文献

佐々木 哲朗・向 哲嗣 (2022) オガサワラカワラヒワ共生社会ワーキンググループの課題抽出. 小笠原研究 48: 95-104.

付 録 オガサワラカワラヒワに関する地域有識者ヒアリング調査

1. ヒアリング項目

①観察内容

- 観察時期 例：何年くらい前から
- 観察地点 例：よく観た場所、島、全く見なくなった場所、最近まで見られた場所
- 観察した季節
- 観察個体数
- 観察した餌

例：20年ぐらい前には、御嶽神社で6月ごろから、5羽程度の小群が入れ替わり立替わり来て、道路脇のイネ科植物を食べていた。

②脅威

- 脅威と思うこと、その理由

③生態 例：観察が少なくなる時期には〇〇をしているだろう。

④保全対策

- 保全対策やWSへの意見

⑤その他

- 意見要望等

2. ヒアリング結果

2-1. ヒアリング協力者：星 善男氏

①観察内容

●観察時期

- ・25年前くらいから

●観察地点

- ・評議平周辺（早川さんの畑）や旧ヘリポート
- ・中村先生の調査で、母島属島の調査を行った（4月～5月）。
- ・集落以北での確認は一度もない。
- ・以前は平島では目撃がなかったが、最近はある。
- ・姉島や妹島でよく見られた。

●観察した季節

- ・5月～6月頃に母島に渡ってきて、9月頃に属島に戻っていく。
- ・20年くらい前までは冬季に母島島内での目撃はなかったが、20年くらい前から冬季にも母島で目撃されるようになった。冬季の属島で、餌不足か？

●観察個体数

- ・25年くらい前は、属島でも母島でも1日20～30個体くらいは普通に見られた。

●観察した餌

- ・ムニンアオガンピ、シマグワ、ソルゴー、イネ科草本
- ・25年前は、属島にはシマグワはあまりなかった。
- ・妹島の尾根上のムニンアオガンピは太くて生育がよく、実がたくさんついていた。

②脅威

●脅威と思うこと、その理由

- ・餌不足

冬季の移動などが変化しているのは、餌不足のせいではないか。

植生は大きく変化していないが、下草が伸びてオガサワラカワラヒワが餌を探せない。

ハトと違って落ち葉などを避けて餌を探すことが難しいのではないか。

モクマオウは樹高が高くなったが、分布範囲はそこまで変化していない。

- ・病気、皮膚病が見られた。25年前は皮膚病の個体はいなかった。
- ・当時の足輪標識調査が負担になったのではないか。

③生態

- ・6月頃に旧ヘリポートなどで、幼鳥を連れた親が見られた。
- ・属島と母島を行き来していた。5羽ずつくらいの群れで、夕方に母島から各島に戻って行った。

④保全対策

●保全対策やWSへの意見

- ・域外飼育は早急に必要。植物でも動物でも、まずは種を残すことを考えないといけない。

⑤その他

- ・属島の水場がなくなっているような感覚はない。

2-2. ヒアリング協力者：早川 保氏

①観察内容

●観察時期

- ・平成のはじめ頃から平成23年くらいまで

●観察地点

- ・評議平周辺（早川さんの畑）や旧ヘリポート
- ・中ノ平

●観察した季節

- ・季節はあまり覚えていないが、中村先生が来たときに、12月に調査をしたが母島では確認できなかった。4月には姉島で確認できた（平成10年頃）。

●観察個体数

- ・平成のはじめ頃は、評議平で100個体くらいは見られた。
- ・その後も中ノ平で、40～50個体の群れが見られていた。
- ・最近はほとんど見ていない、2～3個体程度。

●観察した餌

- ・草本の種子を好んで、なんでも良く食べる。
- ・ソルゴーやウラジロエノキを食べていた。

②脅威

●脅威と思うこと、その理由

・ネズミ

属島のネズミが巣の卵を食べていると聞いている。

母島で繁殖していないのは、ネコやネズミの影響があるのではないかと。

③生態

- ・朝6時頃から、20～30の群れが、各属島より母島に渡ってくる。評議平などに集まって採食して、そこから周辺に移動していた。夕方にまた集まって各島に戻って行った。御幸の浜のデッキにて観察を行った。

④保全対策

●保全対策やWSへの意見

特になし。

⑤その他

- ・当時からあまりオガサワラカワラヒワを知っている人は少なかったのではないかと。
- ・畑ではたくさん見られたが、他ではそこまで集まっている様子はなかった。
- ・畜産指導所の所長の小林さんが野鳥の会の方で、熱心に観察していた。
- ・今保全に関わっている人たちは、自分たちが保全に関わってきたことを知らない人たちも多い。子供たちなども含めて、やってきたことをお伝えしたいと思っている。

2-3. ヒアリング協力者：忠地良夫氏

①観察内容

●観察時期

- ・1990～1991年頃

●観察地点

- ・集落内
- ・小笠原支庁母島出張所付近
- ・最近は、前浜（シャワー室）横の川にて水浴びをしている時がある。

●観察した季節

- ・季節はあまり覚えていない。

●観察個体数

- ・集落内は、いつも普通に4～5個体くらいはいた。

●観察した餌

- ・最近では集落内で、庭先のバジルをよく食べている。

②脅威

●脅威と思うこと、その理由

- ・ネズミ

ネズミの対策を、小規模ではなくしっかりと実施する。

③生態

- ・1日の中で、属島から来て属島に帰る。

④保全対策

●保全対策やWSへの意見

- ・島内の水場が必要、以前はハウスの横に風呂桶などがあつた。
- ・中ノ平も評議平も、農地に水があるから集まってくる。
- ・水場を作ることはすぐにできる対策なので、なるべく早くやる。ただし、ネコには気を付ける。
- ・属島では、ネズミが問題となっている。

⑤その他

- ・水場を作ることは難しくない。農業者に話をしてすぐに何か置かせてもらう。
- ・できることがあるはずなのに、何もやっていない。

2-4. ヒアリング協力者：茂木雄二氏

①観察内容

●観察時期

- ・10年くらい前に、3月～5月くらいに属島調査を行った（林野庁）。
- ・母島以南のラインセンサス調査を現在も行っている（林野庁）。

●観察地点

- ・2年くらい前までは、中ノ平の福田さん、浜崎さんの畑周辺、鉄塔付近のギニアキビをよく食べにきていた。
- ・南崎、すり鉢、ギンネム試験地（すり鉢先）で確認があつたが、最近は見かけない。

●観察した季節

- ・5月～7月

●観察個体数

- ・南崎は2時間のラインセンサスで2~3 個体
- ・中ノ平の鉄塔のところでは4~5 個体

●観察した餌

- ・ギニアキビ、モクマオウ、ギンネム、シマグワ、ジュズサンゴ
- ・草本類が多い。

②脅威

●脅威と思うこと、その理由

- ・ネズミについては、捕食現場は見えていないのでわからない。
- ・メグロが威嚇するような鳴き声をしている時があり、樹上をネズミが歩いている時があった。
- ・羽毛ダニ、病気
- ・ノネコ、中ノ平にてノネコとオガサワラカワラヒワがほぼ同時に見られた時があった(2020年9月)。

③生態

- ・繁殖期は春だが、夏場(9月)に母島島内で囀^{さえず}っている個体がいる。

④保全対策

●保全対策やWSへの意見

- ・島内の情報の集約が必要
- ・重要な情報が関係者に伝わっていない。
- ・島民の目撃情報などの情報が蓄積されない。
- ・保護増殖事業の計画に入れて、域外飼育は早急に実施しなければならない。
- ・あらゆる手段に訴えて、保護していかなければならない。

⑤その他

●意見要望等

特になし。

2-5. ヒアリング協力者：梅野ひろみ氏

25年前からガイドなどで島内の動植物の生態に詳しい。

①観察内容

●観察時期

- ・1995年ごろ

●観察地点

- ・主に集落周辺
- ・ローズ記念館近くパパイヤや草の実
- ・支庁の坂道などでジュズサンゴ
- ・旧ヘリポートの付近でソルゴー、ウラジロエノキ、シマグワの実など
- ・稲垣 勇さんの畑のモクマオウによく来ていた。
- ・南崎のムニンアオガンピにも来ていた。
- ・評議平周辺の畑

●観察した季節

- ・春から夏にかけて

●観察個体数

- ・95年ごろは平均で15羽ぐらいを見ていた。
- ・中ノ平の農業団地で5～10羽ぐらいいた。

②脅威

●脅威と思うこと、その理由

- ・なかなかすぐに思いつかないが、もともと数が少なかったのではないだろうか？その結果、近交弱勢などが起こってしまったのではないだろうか？

③生態

- ・冬には全く見られなくなる。昔、冬にマヒワが30羽ぐらい来たことがあり、見間違えた。

④保全対策

●保全対策やWSへの意見

- ・昔はクザイモンという名前と呼ばれていることなどから昔から島にはなじみのある鳥だったと思う。
- ・住民の畑の近くなどに出没し、生活にも近い所にいたので昔の農家さんなど畑周辺で働く人などには是非WSに来てほしい。

⑤その他

●意見要望等

- ・坂入裕子さんや稲垣 勇さんなどにもヒアリングをした方がいいと思う。ヒアリングの結果については是非共有してほしい。

2-6. ヒアリング協力者：田澤誠治氏

①観察内容

約35年前

- ・評議平の営農研の奥で借りていた畑に約20羽の群れ
- ・地上で牧草やイネ科の種子をよく食べていた。
- ・旧島民の畑の持ち主に聞くと、クザイモンと呼んでいた。当時旧島民はオガサワラカワラヒワという名前は使っていなかった。
- ・集落から南では、開けた場所なら普通にどこでも見られた。
- ・集落や墓地でも見られたが、それより北では見たことがない。
- ・この頃が最もたくさんいて、その後は徐々に少なくなった。
- ・母島で1年中見られ、大きな群れは3、4月頃に見られた。
- ・最近は大きな群れはなく2羽ぐらいで見ることが多い。最近は見廻山で見た。

②脅威

- ・属島のネズミによる捕食と、母島のネコによる捕食の両方が脅威だと思う。

③生態

特になし。

④保全対策

- ・昔の状況は、旧島民で畑をやっていた人の話を聞くと良い。ただし、旧島民は「クザイモン」として知っていて、オガサワラカワラヒワという名前は知らないかも。
- ・稲垣みち子さん（元学校の先生）、稲垣まさたかさん（元営農研）、稲垣 勇さん（中ノ平に畑があり、村議会でオガサワラカワラヒワの質問をしていた）、鈴木京子さん（欣しゅう）、浅沼博文さん、北川さん（漁協、畜指の奥に畑がある）など。

⑤その他

行けたら12月のWSにも出ます。

2-7. ヒアリング協力者：千葉勇人氏

1995年から2004年の間、母島に居住。小笠原在住の鳥類学者
母島では休日にテニスをし、オガサワラカワラヒワの観察地はテニスコート周辺が多い。

①観察内容

●観察時期

・1990年代は普通に見られたが、2000年代に入って少なくなった。

●観察地点

・観察された場所は評議平や中ノ平の畑地、元地集落の庭先。特に評議平テニスコート周辺、早川さんの畑の水場、営農研の畑地（現メガソーラ建設予定地）。

●観察した季節

・4～5月や梅雨明け後夏にかけて。梅雨時期はオガサワラカワラヒワの飛来が無かったのか、自分の外出が限られたために観察できなかったのか分からない。

●観察個体数

・1990年代は、群がテニスコートの上を飛び、周辺で採餌する姿も珍しくなかったが、それがみられなくなった。観察した最大羽数は、南京浜周辺の畑地で観察した群で、20～30羽程。これは、餌が豊富にある場所にオガサワラカワラヒワが集中した結果ではないだろうか。通常の見撃は1～2羽程度が最も多かった。

●観察した餌

・畑周辺で採餌していたので、ソルゴー、イネ科キク科などの雑草の種子に集まっていたのではないだろうか。コトブキギクの種子を食べていたのは直接観察した。

②脅威

●脅威と思うこと、その理由

・何が減少に効いているのかは個人的には確信が持てるものは無い。減少要因として挙げられているネズミとネコについて知っていることは以下の通り。

ネズミ：

・当時からネズミによる農業被害はあり、行政は殺鼠剤の配布（割引？）などで対応していた。農業者の中には、畑でノラネコを餌付けしてネズミ対策としていることもあった。

ネコ：

・内地の愛護団体によって1980年代後半に元地～評議平でTNR（不妊去勢）が行われた。

その後、村役場が 1990 年代後半にネコ捕獲を行った。村役場の取り組みも TNR が基本だが、捕獲したネコを父島の洲崎に設けた屋外飼育場に運んだこともあったようだ。役場のネコの捕獲は罠を個人に貸し出すことで行い、対策地の多くは集落から畑地であったと思う。これらふたつの対策地は、オガサワラカワラヒワが良く利用している地域と重なる。しかし、対策によって集落～畑地のネコの目撃が減少するということは無かった。

- ・母島のゴミは現在父島のクリーンセンターに移送しているが、2002 年 11 月までは評議平の屋外の集積地において焼却処理されていた（現リレーセンターの場所）。このゴミ集積地にネコが多かったかどうかは定かでは無いが、父島移送に向けた造成が始まったのが 2000 年頃であり、ここを利用していたネコがその時期に拡散したとすると、南崎の海鳥繁殖地においてネコの被害が始まった時期、またオガサワラカワラヒワの減少時期と重なる。

③生態

- ・見えなくなる時期にどこにいるのかは解らない。ただし、母島を餌場として利用しているというのは確かだと思う。群がまだ見られた時期に、夕方に属島方向に向かって高く飛ぶ姿が観察していた。一方、母島でビーンという繁殖時のきんず囀りを何度か聴いたことはあるが営巣は見えていない。
- ・オガサワラカワラヒワの利用環境は各島にあるのに、分布が偏っていることを不思議に思う。父島列島では東島では時々確認されているが、なぜ父島では確認されないのか。父島西町の自衛隊の敷地はオガサワラカワラヒワが好む環境が広がっているのに飛来が確認されない。また、南硫黄島は主要な水場が無く、ムニンアオガンピも生育していないのに、なぜ定着できているのか。オガサワラカワラヒワの出現と環境条件との関係には解らないことが多くあるように思う。

④保全対策

●保全対策や WS への意見

- ・向島のネズミ対策が最優先ではないか。繁殖の保全として。向島周辺は潮流が早く、周辺の島からも多少距離があるので、根絶後短期間にネズミが再侵入するとは思えないので、時間を相当稼げるのではないか。

⑤その他

●意見要望等

- ・絶滅の可能性が高まったオガサワラシジミの反省から、オガサワラカワラヒワの保全にはしっかりと予算確保し、対策しなくてはならない。

2-8. ヒアリング協力者：安藤重行氏

母島滞在（1976年4月～8月および2004年5月～2012年頃）

①観察内容

●観察時期、観察地点、季節、観察個体数

1976年

- ・1976年母島滞在時は、姪島でも飛んでいたのを見た記憶がある。生まれ育った山形県では頻繁にカワラヒワをよく見ていたので、見間違わないと思う。

2004～2012年

- ・2004年以降に母島に居住した時期では、沖村元地でメジロの群に混じって、数羽程度確認することがあった。2005年以降は東京都鳥獣保護員となったので、鳥類について積極的に観察するようになった。元地では、大漁寿司の斜め前のレモン畑、ローズ記念館裏辺り、母島小学校の畑、今アウストロのあるあたり。集落内の庭先や畑などで目撃した。
- ・南崎半島部ではすり鉢付近で何度か目撃している。
- ・2005～2006年くらいの妹島鳥島では、繁殖しているクロアシアホウドリのバンディングの際（5月）に4羽ほど目撃した。
- ・年代が定かではないが、父島宮之浜のモクマオウ林で実をついばむ20～30羽の大きな群を目撃したことがある。当時、母島でも少なくなっていたので、内地から来たのではないかと考えたりもした。清瀬苗畑付近にも同時期に群を目撃した。東京都鳥獣保護員の報告書を見返せば出てくるかもしれない。なければ鳥獣保護員になる以前、水産センターの倉田さんの指導を受けていた平野先生が鳥獣保護員をされていた時代かもしれない。
- ・山形のカワラヒワの群の印象が強いので、母島では少ないという印象を持っていた。

●観察した餌

- ・父島ではモクマオウの実を採餌しているのを観察した。母島では地表に降りて何かをついばむのをよく目撃したが、何を食べていたのかの特定はできていない。

②脅威

●脅威と思うこと、その理由

- ・母島で東京都鳥獣保護員として過ごした期間、オガサワラカワラヒワの傷病鳥や死体は

見たことがないため、脅威についてははっきりしない。

- ・ネコによる被害も疑うが、他の鳥のような捕食痕（死体や羽毛の散乱など）を見たことはない。毎週末、フィールドによく出ているが、オガサワラカワラヒワの死体は見つけることが無かった。集落でオガサワラカワラヒワが目撃されていた場所は、餌やりネコが多数集まっている場所と重なる点は気になっていた。
- ・ネコはペリーが来島した時代（1853年）から山にたくさんいたという記録がある。戦前の父島、母島は、島全体に居住地が散らばっていた。ネズミ対策として、各居住地にネコが半野良状態でいたことは想像に難くない。その時代のネコは、比較的人に依存した生活をしていたのかもしれない。その後、人の居住地が縮小したことにより、島の大半を占める山林には人に依存しないネコの割合が増え、野生動物に大きな影響を与えるようになった可能性も考えられるのではないかと。2000年代初期に南崎の海鳥がたくさん襲われているのは延島さんから聞いていたので、詳しい話を聞いてはどうか。
- ・口に腫瘍が出ているのを妹島鳥島で見たので、気になっている。小笠原で保護されたレース鳩個体では、口の中に腫瘍があり嘴が閉まらない個体があったが、鶏の餌を10日間与え続けたら治癒したという経験がある。この様な外から来た鳥に何か伝染するような事態が心配である。

③生態

- ・南崎半島のすり鉢のあたりでは、東側の崖沿いを飛翔し南下する数羽の姿を3回くらい目撃。海辺を南下するので、属島と行き来している印象を受けた。

④保全対策

●保全対策やWSへの意見

- ・飼育施設は、他の小笠原の絶滅危惧種同様、内地に設置して技術開発することは必要だと思うが、必ず島内にも作ることを考えるべきではないか。オガサワラシジミの経験から、島外だけではだめで、島外と島内の施設が連携することでうまくいくのではないかと。この様な体制づくりが必要だと思う。
- ・小笠原の生物は、住民が知らないうちに絶滅寸前となり、気がついたときには手遅れとなる。自分も島内外の研究者から教わることで、生物について気にかけることができるようになったが、もっと早く知っていれば何かできたのではないかと多い。この様な問題を解決するには、やはり子どもたちの教育が大切だと思う。島内に島の自然環境を学べる専門学校や大学などをつくり、島の子どもたちが小笠原の自然を専門的

に学び、守るシステムを作る必要がある。

- ・島外から来島した研究者や学生の調査データを島に残すシステムが必要。論文として世に出されたものだけでなく、未発表データを資料として残す仕組みがあれば、島の若手がそれを引き継ぐこともでき、ヒントや比較対象として活かすことができる。

⑤その他

●意見要望等

特になし。

2-9. ヒアリング協力者：佐々木めぐみ氏

23年前から母島在住。現在、鳥獣保護員。昔から野鳥などに興味があり、内地在住の頃から親しんでいた。

①観察内容

●観察時期

- ・1997年ごろから

●観察地点

- ・観察された場所は評議平や中ノ平の畑地、集落内の庭先など

●観察した季節

- ・春先によく集落内で観察された。

●観察個体数

- ・1997年頃は、集落周辺や中野平の農業団地で12羽ぐらい観察した。早朝によくメジロが食べた後に集団で降りてくるイメージ。

●観察した餌

- ・畑周辺で周辺に生えている雑草などを食べていた。

②脅威

●脅威と思うこと、その理由

- ・様々な要素があり、特定できるものがない。

③生態

- ・秋口までは観察できているがそれ以降はわからない。

④保全対策

- 保全対策やWS への意見
特になし。

⑤その他

- 意見要望等
特になし。

SUMMARY

A report on the symbiotic society “S” working group session

Akitsugu MUKAI^{1*} & Takashi KANEKO²

1. Islands Care, Shizukazawa, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.
 2. Ogasawara Village Assembly Member, Ogasawara Village Office, Nishimachi, Chichijima, Ogasawara, Tokyo 100-2101, Japan.
- * mukai@islandscare.org (author for correspondence)

The Ogasawara Greenfinch PHVA workshop was held in December 2020. The symbiotic society “S” working group discussed how to create an organizational structure, and how to share knowledge and consciousness about the Ogasawara Greenfinch, and developed a conservation plan.

Key words

Civil society, Hahajima Island, PHVA workshop